本文献紹介に示された見解は、航空自衛隊幹部学校航空研究センターにおける研究の一環として発表する執筆者個人のものであり、防衛省または航空自衛隊の見解を表すものではありません。

２０２１年5月１９日

文献紹介 015

艦載機飛行，是勇敢者的事業
～中国空母艦載機の空中給油をめぐる論点～

『解放軍報』2021 年 4 月 21 日

防衛戦略研究室　相田　守輝

中国人民解放軍（People Liberation Army：PLA）の機関新聞『解放軍報』では、「実戦的訓練を先駆的に導いてきた人物」（原文：实战化训练先锋人物）の功労を称える記事が特集されることがある。本稿では、2021 年 4 月 21 日に報じられた人民解放軍海軍航空兵（People Liberation Army Navy Air Force：PLANAF）の功労者の特集記事を紹介する[1]。内容は艦載機部隊の創設時からの苦労話などが述べられており、極めて興味深い。今回は空中給油に焦点をしぼり論点を提示する。

１　中国における報道内容

（１）『解放軍報』（「艦載機飛行，是勇敢者的事業」2021 年 4 月 21 日）[2]

2021 年 4 月 21 日の記事には、PLANAF の功労者として、空母艦載機部隊の参謀長を務める呂朝輝（Lú Zhāohuī）が特集された。

艦載機パイロットであった呂朝輝は、現在より 10 年前（つまり 2011 年）に、空母艦載機部隊に赴任した。呂朝輝ら部隊建設要員は、当初から「教官なし、教材なし、経験なし」という困難に直面しながらも、（艦載機 J-15

[1] 陳国全「艦載機飛行，是勇敢者的事業」『解放軍報』2021 年 4 月 21 日、1 頁。
[2] 同上。

の）テスト飛行を重ね、模索し、結論を出していかねばならなかった（原文：卢朝辉和战友们面对“没有教员、没有教材、没有经验”的困境，一边试飞、一边探索、一边总结）、という。

J-15 への機種転換訓練、初めてのソロフライト、初めての夜間着艦訓練など、絶え間なく求められる試練に耐えた日々を振り返り、呂朝輝は「これほど困難や課題に遭遇するパイロットがいる部隊は恐らくないだろう。」と回想する。なかでも、部隊が苦労したのは「空中給油（原文：空中穿针引线）[3]」だったという。さらに、給油側も受油側も同型の J-15 戦闘機で行われる「バディー空中給油（原文：伙伴加油）」ともなれば、求められる操縦技量が高く、達成するのが困難であった。

図１　J-15 同士による空中給油（バディー空中給油）シーン

出典：《今日亚洲》航母时代中国海军成体系自主培养舰载战机飞行员 20191210 | CCTV 中文国际」『YouTube』December 10 , 2019, https://www.youtube.com/watch?v=j8TLGBwiNWc, accessed on 1 May 2021.（動画再生 8 分 36 秒後の映像）

しかしながら、2011 年以降、彼ら艦載機部隊は徐々に能力を向上し、現在では夜間における「バディー空中給油」までも成功させるほどになった。これら部隊が培った経験が、「空中給油」を活かした飛行訓練のカリキュラ

[3] PLANAF の中では「空中給油」のことを「空中針通し」と呼称されているのが興味深い。高度な操縦技量を要することから、この表現は的を射た表現ともいえよう。

ムも改訂させ、20 以上もの新しい戦法を創出することとなった（原文：探索形成战法训法等 20 余项成果）。その結果、加えて実戦の様相を踏まえた研究を行っていこうとする部隊の機運が高まりつつある、というのである。

（２）中国中央電視台（CCTV）の報道内容

上記の『解放軍報』記事では、艦載機 J-15 同士による空中給油、すなわち「バディー空中給油」の能力をどのように確立していったのか、詳細は明らかにされていない。しかしながら、CCTV が 2019 年 12 月ごろから、実際に「バディー空中給油」が行われている映像を番組「今日のアジア（原文：今日亜州）」で放映していることは、注目に値する。その際、評論家として出演している杜文竜[4]（Dù Wénlóng）は、2012 年の空母「遼寧」の就航以来、PLANAF の戦力は徐々にではあるものの、着実にその能力が成熟してきた、と評価している（図２参照）。さらに、この「空中給油」の成功が PLANAF に「ブレーク・スルー」をもたらした、という[5]。

図２　J-15 が発艦するシーンと評論家杜文竜

[4] この杜文竜（原文：杜文龙）という人物は、スーツ姿で中国メディアに頻繁に出演するのだが、実のところ PLA 国防大学の陸軍大校（大佐）なのである。中国の国内社会に対し、PLA の意向を伝える「オピニオンリーダー的な存在」として捉えることができよう。

[5] 同上、「《今日亚洲》」

出典：《今日亚洲》航母时代中国海军成体系自主培养舰载战机飞行员 20191210 | CCTV 中文国际」『YouTube』December 10 , 2019, https://www.youtube.com/watch?v=j8TLGBwiNWc, accessed on 1 May 2021. （動画再生 8 分 34 秒後の映像）

２　コメント

これら報道を踏まえ、２つの論点を提示することとしたい。

（１）同一機種による「空中給油」が意味するもの

空中給油とは、給油機と受油機による空中での給油活動であり、受油機の航続範囲をさらに広げられることから、航空作戦において有用な手段である。一方で、米海軍であっても昨年には FA-18 同士の衝突事故があったように[6]、「バディー空中給油」そのものの難易度は高い。上記報道のような夜間における「バディー空中給油」ともなると、さらに危険性が増大することは言うまでもない。ここで 2019 年に CCTV で夜間における「バディー空中給油」が報道された事実に着目してみよう。

そもそも空母は外洋にて運用することから、大型の給油機を空母から発艦できない以上、同型の機種からの空中給油に頼らざるを得ない。そのような中、PLANAF が夜間において「バディー空中給油」を成功させた事実は、夜間における活動範囲を広げようという意図があるものと、捉えるべきであろう[7]。それは同時に、中国が「PLANAF の能力レベルが上がってきた」と対外発信したのではないか[8]、とも捉えることができる。

（２）「空中給油」成功という「ブレーク・スルー」がもたらした効果

PLANAF は「バディー空中給油」成功を契機に、20 以上もの新しい戦法を創出した、という。無論、給油機側の J-15 は燃料を満載して給油支援をすることから、陸上の飛行場から離陸しているのであろう。1 機あたりの給油量や給油時間を勘案すれば、「バディー空中給油」では、さほど航続距離

---

[6] “Navy jet damaged in mid-air refueling mishap”, *Navy Times*, February 5, 2020, https://www.Navytimes.com/news/your-navy/2020/02/05/navy-jet-damaged-in-mid-air refueling-mishap/, accessed on May 13, 2021.

[7] これまで欧米では、空母艦載機 J-15 が機体重量、推力、スキージャンプ方式の発艦要領などの理由から、爆装して発艦することさえ困難だろうとも議論されてきた。

[8] Xuanzun, Liu, “Chinese aircraft carriers get power boost by fighter’s nighttime buddy refueling capability”, *Global Times*, July 28, 2020. 2020 年 7 月 28 日の Global Times では、海軍軍事研究所専門家の張野（Zhāng Yě）が、「24 時間戦闘能力が、大幅に向上している」と言及している。

は延伸できない。おそらく緊急事態（Emergency）や代替飛行場に指向する際に「バディー空中給油」が活用されるのであろう。

しかしながら、新しく創出された 20 以上の戦法があるのならば、それらがどのようなものなのだろうか。翻って、PLANAF 内部にもたらした効果についても注目してみよう。PLANAF 内部では、「実戦の様相を踏まえた研究を行っていこうとする部隊の機運が高まってきた」という[9]。

注目すべきは、「バディー空中給油」が単に艦載機 J-15 の航続距離を延伸するだけでなく、部隊研究に「思考」の幅が広がってきた、という事実である。今まで考えられなかった領域にまで、PLANAF 作戦立案者の視野が広がったという、ソフト面での「ブレーク・スルー」がどのように運用要領に適用されていくのか注目に値する。

[9] 陳「前掲文献」（注１）。